

「便利」ということ

おたまたま

教育出版「小学国語」四上

これは、友人がわたしに聞かせてくれた話です。

友人の知り合いに、耳の不自由な女性せうじがいます。その女性せうじが一人で住んでいる家を、友人が初めてたずねた時のことです。げんかんにはチャイムが付けられていました。

「チャイムの音は聞こえないのではないか。」と、友人はとまどいながら、そのチャイムをおしてみました。すると、すぐにドアが開いて、にこやかな出むかえを受けました。

どうして、チャイムをおしたことがわかったのでしょうか。

実はげんかんのチャイムをおすと、家の中の数か所に取り付けられたライトが光る仕組みになっていたのです。感心している友人に、その人はちよつといたずらっぽく、手話で言ったそうです。

「どう、便利でしょ。」

この友人の体験談を聞いて、「便利」というのはどういうことかを、改めて考えてみました。

「便利」とは「都合がよく、役に立つこと」です。でも、それは、だれにとつて都合がよく、だれの役に立つことなのでしょうが。

わたしたちの家の中を見わたしてみましよう。文ぼう具のような小さな物から、家具のような大きな物まで、わたしたちの身のまわりには、たくさんたくさんの道具があることに気づかされます。これらの道具はどれも、わたしたちのくらしを便利でかいてきにするために、生み出されてきた物です。しかし、光で知らせるチャイムの話のように、使う人の立場によつては、道具の仕組みを変えなければ役に立たない場合もあります。

このように、ある人にとつては便利だと思われる物でも、立場を変えて見ると、その仕組みのままでは不便であることがわかります。

少し前の時代まで、道具は、ある程度ていど多くの人にとつて

便利に使えれば、それでよいと考えられてきました。

げんざいでは、そのような考え方が変わってきています。同じ目的を果たす道具が、さまざまな立場の人に合わせて何種類も作られるようになり、一人一人が、その中から最も使いやすい物を選ぶようになってきたのです。きき手に合わせたはさみなどが、その例です。

一人一人が使う道具とちがいが、たくさんたくさんの人が使うせつびについては、そのような解決方法かいけつをとれないこともあります。

歩道橋ほどうきょうについて考えてみましょう。歩道橋は、車を運転する人にとつては、横断歩道だんでいちいち停車せずすむので、大変便利であるといえます。反面、道路を横断する人にとつては、安全ではあるが、いちいち階段だんを上り下りしなくてはならないので不便です。

こうしたせつびは、小さな道具のように、いろいろな立場の人に合った物を別々に用意するというわけにはいきません。したがって、そのせつびを、どのような立場の人がどのようなときに利用するかをよく考えなければなりません。そして、不便を強く感じる人が少なくなるようにつくったり、改良したりしていくことが必要です。

最近では、上り下りするところを、階段だんの代わりにゆるやかな坂さかにしている歩道橋ほどうきょうがつくられています。また、エスカレーターやエレベーターが付いた歩道橋ほどうきょうもつくられるようになってきています。このような歩道橋ほどうきょうがつくられることによつて、車いすやうば車うばくるまを使う人、自転車じてんしゃに乗る人、重い荷物持った人など、さまざまな立場の人が、安全で便利に道路を利用することができるようになるのです。

わたしたちの社会では、たくさんたくさんの人が、それぞれが合った立場で、いっしょにくらしています。ですから、ふだんなにげなく使っているいろいろな道具やせつびが、だれにとつて便利で、だれにとつてそうではないのかを、また、どのようなときに便利で、どのようなときにそうではないのかを、よく考えていくことが大事なのです。